

「東日本大震災」災害支援だより

第4号 2011年7月25日発行

全国移動ネット災害支援の会 〒156-0055 東京都世田谷区船橋1-1-2 山崎ビル204号

◆問合せ先◆
全国移動ネット
TEL 03-3706-0626
E-Mail
info@zenkoku-ido.net

巻頭言

災害支援の会プロジェクト 代表・柿久保浩次

東北の梅雨があけて暑くなった。「なにかせなあかん」と思いながら4か月が過ぎた。仮設住宅の建設が進んでいる中で、被災地の方々はこれからのことを考えていろいろな判断を迫られている。その方々にどう寄り添って支援することができるのか。我々のできる範囲で話を聞き、一緒に考える場を持ち、いろいろな場所で声を上げる。少しずつ進めたい。

●活動報告

1. 概要報告(2011年5月下旬～6月下旬)

●「被災地に赴くこと、集まって考えること」(災害支援の会事務局)

全国移動ネットの災害支援の会が日本財団の助成を基に、現地への運転ボランティア派遣の交通費支援の考え方を決めたこともあって、6月も引き続き石巻の移送レラの移動サービス提供活動の運転支援に多くの関係者が参加し、被災者と直接接しながら活動し、その体験を各地に持ち帰った。

全国移動ネットの総会(6月18日)の記念行事では、被災地とその支援の関係者がこれまでの活動の報告と、これからの活動の方向性や、その課題などについて意見交換した。また、北茨城市では高松理事の尽力により仮設住宅の入居者の自助グループ作りが始まった。

2. 被災地から さまざまな声と活動

●寄稿 I 「被災地にて(6月6～15日) 駆けた1,200キロ」

(関西 STS・日常生活支援ネットワーク/李英樹)

災害支援の会プロジェクトの柿久保さんからの要請を受け、1週間の日程で仙台に出向きました。仙台は初めての地で不安もありましたが、「被災された人たちに何かしなければ」という日頃の思いが背中を押してくれたのでしょう。支援活動に携わった場所は、甚大な被害を蒙った石巻市内を主にして、女川町や東松島、塩釜市の沿岸部一帯でした。

の一員として、翌日早朝からなにわナンバーのセレナで、被災地をフル回転で駆け巡りました。避難所になっている小学校の体育館や公民館、仮設住宅や半壊した家から、被災された人たちを日赤病院や各地の仮診療所へ送迎することがメインでした。

この送迎活動は一度利用した人たちに重用され、口伝えで拡がりましたが、5～6台の保有車両と常時4～5名のドライバーでは需要の全てに答えるのに無理があるようでした。

それでも、利用者の便宜を図りつつ時間調整を求めて、協力して乗り合い、無線交信しながら効率よく車両を走行させるなど、コーディネーターの村島さんは相当神経を使っておられました。間をみながらメンバーの昼食の準備や、頻りに鳴る電話にも落ち着いて丁寧に対応する



岸部一帯でした。

4月はじめからすでに、被災された人たちの移動支援に取り組んできた「移送 RERA」(石巻市内)のメンバー

彼女に敬意をはらいつつ、頼もしさを感じたものでした。

*

現地で実際に車両を走らせながら垣間見る周辺の光景は、目を覆うばかりの惨状でした。「なんと、ひどい…」ため息をつきながら絶句すると、「すこしは、ましになったんだよ。ついこのあいだまで道もなかったんだから…」と、後部座席から老婦人が声をかけてくれました。大阪から支援に来た旨を伝えると、「と一いところから、うれしいねえ、ありがたいねえ…」とつぶやくように言い、仮設に当たったが近くに買いものできる店がないので断ったこと、津波から避難するときに「歩けねーとしより置いて、逃げられねえ…」と踏み留まった隣人が家もろとも流されてしまったことを嗚咽まじりに語ってくれました。私は聞きながら、ハンドルを握ったままもらい泣きしていました。

想像を絶する被災地の状況をこの目で見て、被災された人たちが3か月経った今もなお避難所生活を強いられている現実にただ啞然とするのみ。

この憤りをどこへぶつければいいのか…。愛する家族を亡くし、住み慣れた家や思い出の詰まった品々も流され、仕事まで失ってしまった人たちにどう接すればいい

●寄稿Ⅱ「はじめての災害支援ボランティアに

私たち3人は、6月1日の夕方に現地入りし、翌朝「レラ」の事務所を訪ねました。森岡と池田の2人は、セレナに設置したナビ（ゆづり葉の利用者より寄付していただいた）を頼りに、初回は女性2人を避難所の小学校から仮設住宅に送りました。次の依頼は、海沿いの津波に襲われた釜地域のコミュニティ施設（釜会館）の2階に避難している女性3人を、NPOが運営している「千人風呂」への送迎でしたが、利用時間が変わっていて入浴できず、結局3箇所目の自衛隊の仮設風呂でやっと入ることができました。その場で救援物資を配る情報を得て（釜会館には支援物資が届かなくなっていた）、配布時間まで待つことになりました。被災者が20人位並び、彼女たちはカップラーメン、飲み物、袋菓子などを一人3点選んで持ち帰りました。

事務所に戻ると、早速次の依頼が待っていて、女性2人を石巻駅付近より旧北上川付近の避難所と市営住宅に送りました。車中で、被災された方の話を聞く事が出来ましたが、言葉に表せない辛い体験をされたのに、時に

いのか、どう声をかければいいのか…。立場を逆にして考えたとしても、茫然自失の実感まで湧いてくるものではありません。

ただ寄り添い、悲しみやつらさを分かち合うことしかできないのか…。自問しながら、嗚咽をこらえながら走りました。

そんな重苦しい気分が支配するなか、ほのぼのとしたひとときに癒され、前向きに生きる勇気と感動に触れる場面もありました。

被災地で、短い期間ではありましたが、安心して、微力ながら精一杯支援活動に没頭できたのも、拠点の確保や目に見えないところでの環境整備にご尽力された、菅原さんの支えがあったからに他なりません。また、工場兼自宅の一部を宿舎としてご提供して下さったミキ自工の今野社長ご夫妻にも温かいもてなしをはじめ、一方ならぬお世話になりました。心から感謝いたします。

*

被災地に安寧の日が、復興の日が、1日も早く訪れることを切に願いながら、この1週間、被災地で駆けに駆けした1,200キロの道のりが、被災された人たちの明日への希望の道に連なっているものと信じています。

石巻へ」(ゆづり葉/森岡淳子、池田純子、杉本依子) ●

は笑い声も聞かれ、皆さんが少しずつ落ち着いてきた様子がうかがえたのには何よりホッとしました。この日は支援を始めて一日の最多件数 80 件の依頼があったと聞き、少しでもお手伝いできたことに、思い切って行って良かったと感じました。

海岸沿いの津波を受けた所は、道路のがれきは除去され車は通れるようになっていましたが、家屋のがれきや傾いた家などはまだそのままの状態でした。災害を受けた地域では、外出する手段が無くバスやタクシーもままならず、殆どの人が移動困難者になっているのが現状でした。

(本原稿は、ハンディキャブゆづり葉(『広報60号』)より、転載いたしました)



